

LGBTQ と一般に称される性的少数者の人々は、日本社会において不利益を被る現状にある。その事実に対しての意識改革は徐々に進んでいるように見えるが、状況を改善するための効果的なアクションは未だとられていない。この研究では、そのような状況を創り出している問題の「核」を見つけるため、性的少数者である人々の中から、ノンバイナリーと呼ばれる人々に注目する。ノンバイナリーの人々に着目するのは、社会的に構築されたカテゴリーである「男」と「女」という枠に多くの場合当てはまらないという点で、彼らがレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、そしてトランスジェンダーとは区別され得るからである。

データ収集の手段としては、性的少数者のための団体に所属するノンバイナリーの方々へのインタビューを選択した。

結果として、「性別二元論」に基づくイデオロギー的な考え方と社会システムが、日本社会において、ノンバイナリーの人々にとっての不公平な状況を創り出しているということが発見された。イデオロギー的な「男」と「女」というどちらかのグループに人々をカテゴライズするこのやり方は、他のマイノリティーの集団が抱える問題とも関連している。これらの発見は、現在の社会的構造や考え方を、人々を“2つ”の性を使って区別するというものから、人々を個人として見るものに変える必要性を示唆するものと言える。この変化を起こすために、個人がとれる行動、そして、組織や政府がとるべき行動が存在する。しかしながら、どちらの場合においても、性別二元論が当然のものであると人々の中に社会化されていること、そしてそれが、どのような形であれそのカテゴリーに当てはまらない人々の不公平な状況を正当化するために使われているということに、日本社会は意識的であるべきである。この論文で問題の核であると指摘される性別二元論は、現在の日本社会では当たり前のものとみなされている。しかしその理由は、それが自然発生的で絶対的に正しいものだからではない。社会の方が、性別二元論というイデオロギーのもとに構築されてきたからなのである。

こういった意識や行動、変化は、多数派に属する人々にとっては面倒くさく、不要なものに思えるかもしれない。しかし、多数派が快適に感じるその社会的通念のせいで、特定の集団が抑圧されて良いという理由など、どこにもないのである。 .